

『鳥と獣と花』におけるアーモンド・ボーン之谜

佐藤 治夫

The enigma of the almond-bone in *Birds, Beasts and Flowers*

Haruo Sato

Abstract

The enigmatic notes located at the beginning of nine different title pages of *Birds, Beasts and Flowers* have puzzled the readers. They are apparently more difficult to understand and challenging than the poems themselves. The present author analyses the note put to “Flowers,” with special attention to “the almond bone” and finds that D.H. Lawrence successfully presented his view on the relationship of the soul and body from a traditional Jewish interpretation of the life and death of human being, slightly alien to the Christian interpretation, indicative of Lawrence’s drift towards foreign religious doctrines in his late years.

Key words : almond-bone, *Birds, Beasts and Flowers*, D.H. Lawrence, poems.

解題ではない解題の謎

D.H. ロレンス (1885-1930) の『鳥と獣と花』には、極めて興味深い解題に相当する文が付けてある。序とも言えるが、このように難解であると、イントロダクションの機能を果たしているとは思えない。興味深い点というのは、全く「解題」になっておらず、詩集の中で最も難解な部分だが、詩集の各編の解説になるべき解題であると言う点である。もっともロレンス本人は、これを解題 (a bibliographical introduction) であるとは言っていない。ロレンスの死後に刊行された補遺集『フェニックス』でも、“Notes for *Birds, Beasts and Flowers*” (PX 65) として、曖昧模糊とした取り扱いとなっている。詩集の各編の先頭に Notes がつくというのも奇妙な構成ではあるが、他に適切な呼び名が考えつかないというのが真実であろう。本稿では、置かれた位置だけを考えると、一応適切に見え

る「解題」としている。

この『鳥と獣と花』に付された9つの解題の中で、最長なのが「花」の解題である¹⁾。

Flowers

“AND LONG AGO, the almond was the symbol of resurrection. But tell me, tell me, why should the almond be the symbol of resurrection?

Have you not seen, in the wild winter sun of the southern Mediterranean, in January and in February, the re-birth of the almond tree, all standing in clouds of glory?

Ah yes! ah yes! would I might see it again!

Yet even this is not the secret of the secret. Do you know what was called the almond bone, in the body, the last bone of the spine?

This was the seed of the body, and from the grave it could grow into a new body again, like almond blossom in January.

No, no, I know nothing of that.”

“Oh Persephone, Persephone, bring back to me from Hades the life of a dead man.”

“Wretches, utter wretches, keep your hands from the beans!” saith Empedokles.

For according to some, the beans were the beans of votes, and votes were politics. But others say it was a food-taboo. Others also say the bean was one of the oldest symbols of the male organ, for the peas-cod is later than the beans-cod.”

“But blood is red, and blood is life. Red was the colour of kings. Kings, far-off kings, painted their faces vermilion, and was almost gods.”

「それから、昔々のことだが、アーモンドは復活の象徴だったんだ。でも教えてくれないか。どうしてアーモンドが復活の象徴なのかを。

君は見たことがないのかな。南地中海の冬でも強い日差しの中で、一月や二月にアーモンドの樹が、栄光の雲につつまれて再生するのを。

おお、そうだね。またあれを見たいねえ。

でもこれが秘中の秘というわけではないのさ。体の中の脊柱最後の骨は、アーモンド・ボーンと呼ばれたことを知っているかい？これは体が生じる種になる骨なのだから、お墓の中からも新しい体が生えてくることのできる

のさ。丁度一月にアーモンドの花が咲くようにね。

いや、それは全く知らなかった。」

「ああ、ペルセフォネーよ。冥界から或る男の魂を私の元に持ち帰りたまえ！」

エムペドクレス曰く、「ええい、この悪党めら。豆に手を出すな」

ある人によると、豆が投票に使われていたから、豆は政治だったのだ。でも、豆は食の禁忌だったとする人もいる。また、こう言う人もいる。豆は男性器を示す古代の象徴であった、と。豆の莢はえんどう豆の莢より旧いのだから。』²⁾

「でも血は赤い。だから血は生命なのだ。赤は、国王たちの色でもあった。国王たち。はるかな昔の国王たちは、顔を赤に彩っていて、それ故に神に近づいたのだった。」

(翻訳は筆者)

読んだ者は等しく、この難解さに苦しむことになるが、中でも特に目を引く謎は、“the almond bone” (拙訳では「アーモンド・ボーン」としてある)である。

アーモンド・ボーンへの言及においてロレンスが言おうとしたのは何であったのか。文章から読み取れるのは、アーモンド・ボーンという骨が私たちの体の中であって、死んでしまっても、他の骨が粉々になっても、この骨だけは滅びることなく形を保ち、そこから他の骨や筋や筋肉が「生えてきて」、人の体が再生することだけである。解題の中でもっとも行数を与えられているこの骨に対する記述が、この解題の解釈における鍵となるのではないだろうか。

アーモンド・ボーンとは？

ロレンスによれば、体が生えるのは「脊柱最

後の骨」という。つまり脊柱下部なら、仙骨 (Sacrum) と尾骨 (Coccyx) であり、実際にはこのいずれかがアーモンド・ボーンなのだろう。仙骨 (Sacrum) は、「聖なるもの」という語源から考えると、動物を生贄に捧げていた名残であると思われるので、候補としては妥当である。しかし、尾骨 (Coccyx) はどうであろう。「(鳥の) カッコー」という語源であるから、もともと人類の祖先が備えていた尻尾の名残であり、鳥の「嘴状の骨」であることからして、こちらのほうが、アーモンド・ボーンなのであろう。しかしなぜ「アーモンド」なのだろうか。

特定の「体が生じる種」としての骨から体が生えるという死生観を、ロレンスはどこから得たのであろうか。地中で腐って散逸した部分があっても関係なく、このアーモンド・ボーンだけは、分解することなくもとの体が「生えてくる」というのだ。これは魂も同時に入った全人格も含めての「復活」ではなく、体だけが冬眠していた種子が芽吹くのだから、体の「再生」が行われると、死亡時に体を離れてどこかに行っていた魂が帰ってくるという考え方³⁾ (Gordon & Schwabe 18) である。このように、体の再生に焦点を当てた死生観は、キリスト教の枠組みを軽々と超えている。

ユダヤ思想との類似点

20世紀を代表するタルムード学者の一人であったギンズバーグ (Ginzberg, Louis 1873-1953) は、人の体の組成について、極めて興味深い解釈を提示している。

人の創造について天使達が遂に主に同意したので、神は天使ガブリエルに言った。「地の四隅から塵を集めてきなさい。そうすれば私はその塵で人をつくるであろう。」ガブリエルは主の命を果たすべく出かけたが、地は塵を集めることを許さず、ガブリエルを追い

払った。ガブリエルこれを咎めて曰く、「おお地よ。主の言葉を聞かなかったのか？ 支えも無しに水の面にお前を据えて下さった方のお言葉を？」地は答えて曰く、「私は人に呪われることになる運命なのだから、それも人が存在していることでのろわれるのだ。だから神がご自身で塵を集められるならよし、それ以外のものにはさせぬ。」神はこれを聴かれると、御手を伸ばして地から塵を集められ、人を作った。地の四隅から塵を集めたのは、地の東に生まれた者が西で、また西で生まれた者が東で死んでも、地が受け入れを拒み、生まれた場所に行けなどと言ったことがないようにとのご配慮からであった。どこで人が死に、埋葬されても、そこから生まれた者として地に帰るであろうから。また塵は、赤、黒、白、緑と色があって、赤は血を、黒は内臓を、白は骨と血管を、緑は青白い (“pale”) 肌の色を示していた。

(翻訳は筆者 Ginzberg Vol. I 54)

本稿で注目するのは、人体の組成について、部位別に色が入っていて、予想通り、骨は白(でもなぜ血管 “veins” が白なのかは不明) であることであり、そこからやっと、アーモンドの白い花と骨の連想が見えてくる。

ギンズバーグによれば、ノアが助かった大洪水は、アブラハムの骨まで完全に溶かしてしまう勢いであったので、アーモンド・ボーンも溶けてしまい、蘇ることはなかったとしていて、その大洪水以外では、この骨は不滅 (“... is otherwise never destroyed”) であるとしている。(Ginzberg Vol. V, 184-44)

骨からはじまり、そして

ロレンスにとって、この不滅の骨から身体全

体の再生は、白から始まり血の赤で終わるとしていたのではないだろうか。巻頭の解題を読んでもみると、1月の白いアーモンドの開花から、人の再生が始まって、アーモンド・ボーンから人体が再生されて、次は魂を冥界からペルセフォネが連れ戻し、男性の機能を果たす「豆」つまり睾丸が付き、最後には、血の色である赤に肌を染めた、神々しい人間ができあがるという、プロセスを描いている。ロレンスは、“Flowers”の解題の中で、人の繰り返しになる再生と論理的帰結である、輪廻まで視野に納めていたのではないだろうか。

ロレンスの読書習慣については、詳細なリストが作成されている (Burwell 124) が、ギンズバーグの書物も、ユダヤ教の讃歌 *Tehillim* もリストアップされていない。しかし、極めてユダヤ的な、アーモンド・ボーンに代表される、人の死後の再生プロセスを、なぞってゆくと、かならずやどこかで、この再生理論と出会っていたことが推察され、今後の課題と考えられる。

注

- 1) Birds, Beasts and Flowers 構成表
果物：柘榴，桃，無花果，花梨とナナカマドの実，葡萄，革命家，日の沈む国，平和
樹木：糸杉，無花果の木，巴旦杏，熱帯地方，南国の夜
花：巴旦杏の花，紫のアネモネ，シシリアのヒヤシンス，ハイビスカスとサルビアの花
福音書の獣たち：マタイ伝，マルコ伝，ルカ伝，ヨハネ伝
生き物たち：蚊，魚，蝙蝠，ヒトと蝙蝠
爬虫類の生物たち：蛇，亀の子供，亀の甲羅，亀のファミリーコネクション，雄亀と雌亀，亀の愛技，亀の叫び
鳥たち：雄七面鳥，ハチドリ，ニューメキシコ

の鷲，青カケス

動物たち：驢馬，雄山羊，雌山羊，象，カンガルー，犬のビブルス，クーガー，赤い狼

精霊：ニューメキシコの男，タオスの秋，西に呼ばれる精霊，アメリカン・イーグル

- 2) 本稿では、原文の引用符の数の不一致をそのまま再現しているため、このカギ括弧は、閉じる部分のみである。
- 3) 「生きている間も身近に死を感じていた古代エジプト人にとって、生きていることは ka と呼ばれるものを、誕生時に神 Re から受け取っている状態であり、死は ka が体から出て行くことであった。古代エジプト人にとって、ka と人体は、宿泊客とホテルの関係であり、出て行った宿泊客は、別の場所ではホテルと会うことが無い。しかし、人の死後の世界でまた ka と出会うという。それ故墓には、ka が体に戻ってきた場合に備えて、ka の食料を備えるのが常であった。」

Bibliography

- Lawrence, D.H. *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. New York: Viking, 1971.
- Lawrence, D.H. *Phoenix—The Posthumous Papers of D.H. Lawrence*. New York: The Viking Press, 1936. (cited as PX.)
- Letters of D.H. Lawrence*, Cambridge U.P. 1987-1993 VOLS. 1-7
- Burwell, R.M. “A checklist of Lawrence’s reading.” In: Sagar, Keith ed. *A D.H. Lawrence Handbook* pp.59-125, Barnes and Noble Books, New York, 1982
- Ginzberg, Louis *The Legends of the Jews* (org. 1909-38) Forgotten Books 1998
- Gordon, Andrew H. and Schwabe, Calvin W. *The Quick and the Dead: Biomedical Theory in Ancient Egypt (Egyptological Memoirs)* Brill Academic Pub. 2004/11/30)